



日本絵類考

五

10
75
11



日本佐類考卷五

目錄

一筆画

上下画

細密画

文字画

水画

靴画

ひし画

大工雛形画

さし字佐

大画

略画

鳥月画

盆画

佐筆

佐兄弟

さし佐



一筆画

嫉遊笑覧ニ一筆よりハ今昔物語ノ比敵の山は
無初寺ノ義清阿闍梨とワリ増重と好きて鳴
呼重は上も也筆も、な、た、る、や、な、と、も
た、一筆ノ書た、よ、う、ち、之、を、以、て、木
ノ、こ、う、う、き、を、な、し、紙、つ、ま、り、か、き、し、る
人、あ、は、ハ、品、物、一、つ、許、を、書、た、る、亦、人、う、せ、う、れ
ハ、端、よ、り、許、人、の、形、と、書、て、お、く、の、早、小、的、と、か
ん、か、き、た、を、ら、中、よ、ハ、筆、の、折、く、形、と、お、り、
て、墨、と、細、く、引、く、た、を、さ、し、也、お、う、し、き、後

見しつゝハ福年の以て唯奇なる事と云ふこと
はと云ひてけしと云ふは編圖と云ふことと
と極也

逸人画史ニ大川橋海下伝ハ日市場の人なり書
画小可なり書ハ佃井和棋の門人画ハ山本養徳
は門人なり後連綿画しりしものと云ふこと
海推量醉仙等の事あり

按ニ一筆画鳴呼画連綿画と一カク文政六年
尾張名古屋の書肆永平屋東四と一筆画譜一冊
と刊行する巻端ニ尾張の福善高先生巻端表花

の北高戴斗先生願意とありいと福善高の画
きありと云ふ北斎其意と願き画きて一冊と云ふ
ものなり一筆画て極意は他鳥羽人物等とあり
たると一筆画なり福善高ハ丹羽氏表とあり
珍堂と号と漢画の大平池大雅の雅友なり又余
ハ大川橋海の画と云ふ一筆画の壽老の一幅と
花と云ふ緒在紐自名曰連綿画と題一橋海衛の款
あり傳ハ乙亥歲秋八月二十日於奇膳堂揮毫九
皐又題と書きたる九皐ハ佃井和棋の子なりこと
女面雲煙の旧画と云ふ雲煙自筆雲煙子登の海

さくら佐

さくら佐は口小言小能いさう、こゝろも佐佐木
ふきて人とさきと世と観るの影をいふ佐也
の謎重アクズリたし皆この影なり又、の
振宝珠小松魚と重うて日本橋とさくら佐全貌
と重うて尾浪石古伝と表と、たし亦は影なり

古伝備考小遠野軒在り近江國なる安土の伝
見たり御殿の佐馬小男ふ、様とつきて萬と情
小持ふき驚と行ふ小持て例小振帳とつて

うらと待所永徳り重々うらそことい信長云は
好くうて氣を直ふつりゆそつりせけハ月と
持とつり事とさとして信よ作付りしりな玉孫と
しき國なりとつりけささる信とつり信よて
詞の意とささる解りしんとの義を興行し
こつりつり信世の判事とのつりものいさ
て信の唱くの鄙ひたつり其判ト物の古雅
ちりハ今も執事の判事為高府ありつり又文字
と加つて書けりハ古印本の枉言紙ハ漢編と重
きてぬ文字と副てうまらぬとよませたりなど

なりと

鄙都言種 享和二年小世の書は意ハ男ハいり小
森羅子著
と胸と寛くし心ハ持らたる様のくくもな不
し物事ハ落とつりして論ハ事なつたのりさ
とめとつり時ハ(稼くと杖防くふよせつりな色)其
月と揚りとのわくし詞なり(月と真ふよせつり)
付ハ云織田信長云江州安土小おろせつり時ハ在
同ハ長押ハ世重とめけさせを智のくくよ志
とささるしり信長果うせたりして後ハ孫織
田貞幹再ハ是とさるし尾張國をり室山寺と云

寺へ納められしものが今も其の寺にありし
本朝臣印傳、島形僧正覺融、或村東寺住持、供未儀
ニ充てしめて貢納せしこと、監主の奸曲なり覺
融、或村東寺住持の風小吹き、影をて虚言ふりし
つゝ、さうして貢納せしこと、親とてゆゑ上聞小
達一供領とありし、法の如く小僧とて、監主
ことと知らたると、即ちその住持を、或村
信節、いこととて、島形住持のたらしめし、誤りし

上下画

上下画ハ一ノ内轉圖一画上下と見しハ二画
となりしものと、之ノ内、初新徳黄莊小傳、上下画
より、即ち之を、一説小古鏡の嘴文、たりし
以、或人の積小開口如、喉世上者、冷暖閉口似、怒
又面逐高、低

大画

逸人画史ニ古洞和尚系於淨福寺の住持と云丹
書小可なり最古圖と稱す物なり今茲よりハ
宗師妙心寺小あり涅槃像なり又此画ハ七福神
及古画の像あり世ハ古洞の古画と稱す其大圖
ハ古洞のハ餘人の企てあり所ハあり
書画一覽ハ古洞存ハ明孝号虛無和州郡山西志
寺ハ修々画法亦執を暇して行筆甚ハ好して人
物と画き多ク古画と号す又大画ハ能ク豪放益
ありハる

逸人重史、高田政輔、江州日野村の上の人なり
云々善画の聞あり、百峰及龍輿等の画、人の殊
脱き、とらりなき、佐治福子の古洞和尚の画も、
大画の法を學べり云々

経本倭比事、大画ハ筆勢と才、不用力、一健
筆、ふゆ、一、和ふ、ふ書、いぬ、を、て、え、や、
そのひき、社頭、の、佐馬堂、横の、天井、あり、ひ、の、柱、
尾丸、筆の、画、こと、り、龍尾、獅子、大鳥、人形、の、数
と、多、く、画、々、々

按、大画ハ、別ハ、一法、あり、て、画、き、馳、せ、その、なり、

と、と、物、画、の、大、画、と、稱、ま、り、ハ、北、典、司、の、涅槃
依、古、洞、の、大、黒、筆、なり、其、の、他、大、なり、ハ、蓋、一、葛、錦
此、画、々、達、磨、の、大、画、ハ、ま、り、と、の、や、う、々、一、其、の
大、さ、墨、百、廿、五、あり、て、本、儀、の、横、桐、幕、子、等、と
きて、こと、と、画、き、て、印、の、護、國、寺、西、國、の、金、剛
干、場、等、々、と、画、きた、り、其、重、信、々、ハ、唯、尾、州、石
古、屋、小、村、で、画、々、ハ、今、橋、口、地、の、西、横、新、小、松、尾
一、と、あり、詳、細、ハ、拙、著、葛、錦、其、高、傳、小、能、り、て、え、
一、一、こ、と、小、次、々、ハ、新、川、國、芳、々、九、段、龍、の、像、也、
一、一、拙、著、新、川、表、列、傳、々、々、々、永、永、六、年、六、月、市、八

日西園柳指の割烹店河内居りて在該師梅の庄
持事々書重命と信と一時廻芳ハ大重と有りて
人目と驚りたり其國ハ水餅傳中の一人九段能
史進の條より其廿の日廻芳ハ門人等と共に大
位その梅の浴衣と云て書貼るあり一尋と十
尋ありたり大紙と在ありまきひりけ又酒樽
小餅へたる墨汁と侍ありたり大筆とあり
重き出たりか忽ち一史進と重き信より
其刺書の九龍と重き一射馬雲の所ハ手紙と出
一其西端ハ藍ありい薄墨とつけてくまらるるを

あり史と云て己り云て浴衣と脱きて持中の墨
汗ハ浸り史進ハ踏りかけたる巖石と重き一が
筆力曾別意匠奇絶観る者感嘆と云るハあり

細末画

浮世位類考橋本圓の條小姓に橋本村氏名に有
親宗兵衛と稱し後素野と号し浪居の産人云々
刻板の巻画に細末と評すは、粧束奇巧け人々其記
す云々享保時代刻板の巻画在土刑農園量と娘
と云々云々一丈と云々云々細末の板本と
見云々云々
某氏筆紙上葛飾北高田白浪云々市袋の大画と
あり云々あり云々末一巻に在二冊と畫く人々亦
肉眼と云々云々云々云々云々云々云々云々

文晁画法小全先小清の呉像恋々細画と記す此
間運呈此と信山小祝玉成々牙画と載せ云々康
熙初年浙杭祝玉成号培之年八十餘画事入微渺
如秋毫之本全得一牙牌長一寸五分闊一寸一面
画虬髯下海其中虬髯云李靖白髯虬髯夫人奴十
人婢十人箱籠二十楚々排列鬚眉畢具上画四一
鬚筆画分明一面画二十小児種々遊戯志備内一
小児放風箏其像有數十丈之勢高立飯焉亦可弁
焉然其筆墨所々特十分之三四年至於粒末而真
書絶句瓜仁而羅漢十八無一不模糊觀者以顯微鏡

映之無一苟筆此我邦の細画は日謝在杭五
雜俎の中にも亦載す
按に古来細画と云くはもの有るをいふ
寺所花の併画わらはれ佳と細画やして肉服とも
て親く結りしものあり形工膳友寄書飾此高
扇の彫刻下画一百三十有葉と載す一が其大さ
方四分五分或ハ一寸一寸五分其圖ハ竹とも細
畫とて着色極て精し人物あり花布あり鳥獸
あり中小奥州松島の全案と画きし一葉あり
堅一寸五分横二寸五分の中より松島の島嶼

と画して考へ一老麻ありてを以て浅州公園
として豆粒へ顔自念佛又ハ神仏の名号を記して
考へたものなり

略画

浮世絵類考北尾政美の條小狩野家の筆意と學
い又光徹或ハ芳中ハ画法と考へ略画式の工式
也ハ行のよし云々之年の佐手本ハ此人の筆意
是より世ハ薄彩を指の画も本大ハ流行云々
或ハ年表享和年間流行物と考へて條ハ北尾意
高略画式と考へ浮世画の畧画と工式ハ彩を指
ハ彩本敷篇と梓行と
按、北尾政美ハ銀形氏佐稱と改メ名ハ保真と
号と号ハ北尾重政の門人之畧画と工式ハ畧画

式畧画花叶畧画式意高畧画等と著と又芳中
ハ中村氏宗師の人浪花小伝一光琳凡と画と佛
語とよとと余青芳中画きたる粗画の拾遺
とるよとと畧画力よとと善く其故を得
て頗雅なり意高の學ひよとハ蓋しこまの可
なり

文才画

圖画一覽小高野山園方野日記云大師け山とか
うとゆひ一注性流の坊より何れか佐所とい
ふとも乃ゆきよとて竹の井とて一木と
木と鳥馬なりとて文才そのととゆきよ小
ゆとせ信ひよとゆきよとゆきよとゆきよ
嬉遊笑覧よへマムレ東入行と云我書遠想新隨
筆小書遠流よへマムレ入道の四百年に前物
あり其筆よゆきよ横心と云へと書流波集五
入及のよとゆきよゆきよゆきよ佛師とてやい

くよへまふし法こい竟永中の俳諧をも又山の
井ふ宝庫のうけを重よ〜何〜うねとふい
合よて 圃佳小何〜うあやへまふし表本の付
誰袖海由之軒自序こへまふし入及のね〜んと
了と勅長懲悪の及ねよ去うと云く以外山水天
初〜ん〜りのこと信の教身〜鳥居丸の臣の
青表紙の草子こ文字重〜て表者と云〜書たる
あり(余う福年の比成人寄書重悪と〜し頭〜て
程教と〜空〜い〜れい天ハの志慕あ〜と云
らとわやり〜とこ〜信〜て〜か〜てや〜

こ〜あ〜さ〜今〜う〜ふ〜い〜出〜ま〜し〜書〜つ〜ま
曆は是の及びの草あふ文字重〜て表者な〜の
形と文あ〜て〜き〜既と〜ま〜い〜信〜て〜か〜き〜人
た〜とのあ〜又曰く古き〜のふ天神の二まふ
て昔表海産の係と云き人老の二まふて掃巾の氣
を〜つ〜是〜いと真言信の五草〜て梵字と云
きて佛係と信〜とて出〜つ〜

鳥目画

鳥目画ハ漢画の一法ニシテ又西洋の画法カ
ミトツヒ又我國の画法ナリト云其奈何何ト云
スヤクニ評スルハ鳥目画ハ在鳥天上ト下
ト又わろ一諸物の真相をスルヘキ所ナリト云
きたるものナレハソレノ文化八年迄也佐師侍
川春麻部能者東西庵南北ノ傑也下界改會一冊
と著ト其画ハ即鳥目画ナリト南北の序ト輕業師
の冷汗ハズンガノハハ落チ機物スルト云
簀の子ハ淡ハ那那の取の葉をさ白一引忘との

とく船ハ氷の日蝕月蝕よりつて土吾地ハ表烟
 と南部よりなるは雨の火の見番ハ異版版の
 傘と暑ハ本捲舟の客ハ女帝のこころ葉つけと
 きてお見立かなさいの老ニ檀目切りの筆と如
 しく角のこころしてくつてさきふ堂ふぬいとく
 てうね高き家ふのわきてさきハ煙たつ維々庵
 と板橋つてぬかりとい物干の夕佃橋ふ思ひい
 ふたう後くそ若林堂の主せとくくそ冊の代
 とくつて何と釣埋^{つり}の露と礎ふくけて雲飛の
 ともふ談字十五ひらの叶紙とそさくこれ

佐重黄徳才五集ふ山田海標の後ふ高山と画く
 ふ漢画ふ島月法とくくあま室中飛翔の鳥つ下
 一瞰ふ所の山頂とまそこのくつて洋魚法とそ
 論とれハ理ふ遠くこれとも漢魚法と於てハ美
 ふ所なると云く
 日誌才十一集ふ洋画とそ本日法あそボエルド
 アイビウとくくくいと初とれハ島月系とくく
 委くくく画法怡暗会とそ世の法ハ地圖法の一
 種とて出於所又ハ原師の系象と実見とくく如く
 了くく出と射ふ月とくく東洋地圖ハ側見法とくく

て書をとりしるは西洋の地圖に下見法にして是
又書をとりしるは西洋の地圖に下見法にして是
一法として英國の景色の志を添へて遠くを示すの
法なり西洋書籍の挿画は其の法を倣ふ所の法
法なりと

水画

水画ハ文化年間海軍の人如本氏一雄仁持堂の
奈明より即水面の細砂と浮んで重と化して
以て文政元年の式一書と著つて題して水画指
南といふ其の凡例は一凡水の上の物かくるは
古くは流るるものかたを疑きまのたしよ
して行水ふくまゆくもまもるなりあると云
つゝねやまもるは流るるものたしよと云
るは流るるものたしよと云るは流るるものたしよと云
るは流るるものたしよと云るは流るるものたしよと云
るは流るるものたしよと云るは流るるものたしよと云

國とありしに用ひやう國の侍ふ委しきありしと
て去りてけだ具わしきありしありし人といふ
いよきやうし製して用ひし

一水魚八種と國しては書ふ載とたふし砂の用
りやうし心得ある國のしと出でてなすし一
らとんり存り砂して画きたるやうと平ら友梅
庵より筆をてりしやうしを画法よしよありし
は國中水面よ波とわしきし、岳の中よ月越の
水ありしやうし其余の魚面よして是よ准して本
よし一為しよ魚の善悪よ相し、いし

一文字とわしよハ画とつし、うし流とて砂
ときしつし、いしやうし、の画書よして、うし流よ
とさし、事なり

一いぬ、子のし、は枯平ら友五六書つたに
の言ふあつし、は水魚十種と載し、なすし、
るし、もの進し、平ら友よつし、其術と書ふま
うせありし、とわし、いし、今昔この枯平流
りきそよなれてわし、つし、秘す、いよつ、走のたし
への知し、させし、うし、ありぬといふ、きし、けふ
いぬ、わし、んとたしがまし、いし、いし、いし、き業

かきつてうらひこの水魚のく付き砂の積へ
茶に引ぬちの樹葉をうてきつては書かあ
り尚も度々せし傳つて好事のくのもてあそ
ひにちかんとくそちをたさといき家たそ
くもこの書と又く時ハ即坐ふ水向ふ砂石と
うくそ伝書とわきまをききと評ふあうと
そいし書と評て其こくちかんとく時ハ平い
つとくと告ぐの器と責り伝つてくく小言ふ
ことか

文化丁丑如月

浪華 仙鶴堂一雄識

○沙石製方傳

一 地砂拾やりの事

もて砂ハ土氣の交るたハあ〜〜いつとふ
とあは川中ハ砂と貝殻とを兵庫砂ともいふ
け砂ともてて裁度ハ川水とてよく洗ひ日ふ不
して後未粒研ひハ小末胡麻芥子のち〜〜大
小法并ふ如くいふけは砂拾月 百月 白幌 藤月
はあ〜〜は撒目血海と合せ〜〜をちんかひと
いかによのちちうけ〜〜あきよとて後
さ〜〜あけハあ〜〜葉のさ〜〜あ〜

とあるとともくくき又好くひふわけり再はか
たきまなり此粉の用わうくハ山林人物を
行ふとも其画の地をなすは存あかくなまけ
粉なすてい原のけり存しこけと地砂とりよ
一砂粉の傳

若ふつゝ地砂とやけんうてあう細末う
て物くひよ通一川水漬けくじん粉の如き
くハ粉水ふくくとさりて歳節も水とくゆつ
けのくハ粉水くくも文とあまの起ふくけ
砂のさきけあくくくくを捨て後水干して

又好くひふくけ是ふ巻と潔めありと乾して粉
巻の佳とやまつ潔めりとの事い委つて次よ
出さる又白く巻石よ月あまハ八方砂なり
物なり粉ハ備後まら中細末くくは活を引
くと他流うて浪粉とよふ是ふ巻と活へて巻
の粉もくも世浪粉ハ製とくくハけの水更ハ用
るくハ漆物砂のさきけ共ハ川砂の粉とくも
るうハ粉とくくハ細末の仕様川砂ハ相
くくハ粉とくくハ去るて用也

○色砂の傳

一 青色

岩緑青よりハ酢緑青よりハ川水三日より
漬多き毎日水とくく後水干しと好くし小か
けけ月方十分砂粒ニ白硫黄五分右に小かけ製
する支地砂の所小いし、好く仍て以下深色
茶方の分量のしとあけて製の仕事と異な
し准しとあし
右一淡色の物糖と好くをよハ後後の砂粒
と用也し川水とてハくつとあし以下と
けのこし

一 黄色

山椒子とくく葉、くを去る砂粒とくあけ
干しとく、又雌黄石黄とて深しとく、其彩色
の多しとく、此月方十分白硫黄五分右割合の
製希しとく
黄ハあてむわく、く五日はくあしハ石と水
上小香とく、好く、く、く、ハ所、ま
法あてて書くと物
一 赤色
茶と川水三日より、漬け多し、水と仕

之水干しては目 十女 砂粉 一女 白泥 五女 大洞合
の製法は如左

彩色の品は多くて丹并板灰砂おと用ひては
分量製法も小相白一むては多量小用ひては
粘朱 一女 長去丹 五女 砂粉 一女 白泥 五女 大製法
小同

能るハ揚々むらむら〜〜 大平〜〜ハ漆〜〜
別小口傳あり

一白色
砂粉 十女 白泥 五女 製法 一女 白泥 五女 大製法
石膏寒水

石膏とも相用彩色もよくて漆の上と用ひても
あり 時耳よ〜〜

一黒色

砂粉を濃墨にて深〜〜 乾〜〜 五月方 十女 白
泥 一女 製法 一女 白泥 一女 是等の砂粉ハ川水と用
ひては〜〜

一藍色

石膏を漆と漆〜〜 の〜〜 分量製法と
〜〜

一花色

極上の粉藍焼 板かき 川水三日そくして浸

し たき 砂粉と漆を乾かし は 日方十匁白焼

ふ 洞合製法 茶 下日

一 淡黄色

花色の藍と漆 用 中 の 下 て 製 り ころ や

あ

一 淡黄色

雌黄 ふ あ い ら う と 指 文 と 虫 家 上 草 の 汁 と

ふ そ ぐ て 砂 粉 と 漆 を 乾 かし 用 中 濃 漆 は 任 の 具

は 用 中 方 下 至 割 と 一 草 方 製 と 一 茶 下 日

一 柑色

柑木の色と た ち を う り 製 し て 流 漆 と 年 の 色

の 砂 粉 と よ ぎ 福 と 文 と 合 と 用 中 と

一 桃色

燕 脂 と 砂 粉 と 漆 を 乾 かし 用 中 日 方 十 匁

白 焼 と 右 洞 合 は 玉 つ て 用 中 と 大 さ う け 製 と

あ

一 藤色

蒸 け し て 砂 粉 を 二 遍 と う り 漆 を 乾 かし 用 中 日 方

方 十 匁 白 焼 と 洞 合 製 と 茶 下 日

一 藍色

その日の汁にて 砂物を漂わす 茶方を量共小
茶山印

一 紫色

生燕脂小 藍紙と交とありて 砂物を漂わす
又 葛汁小 漂わ乾くも 奉丸八箇と 茶山印にて 大
拍栗小 茶山印と 用わす 右の汁と 分量
茶山印にて 奉丸小 別小 竹小 茶山印にて 茶山印
いりて

一 金銀砂子

砂子より 粉紙と 水くす 薬製と 用わす 其
金にて
此の漂を 詳多あり 〇〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
茶山印

一 黄砂の夏

砂大さ 山椒粒と 大豆と 茶山印の 砂目方
百目 白紙 〇五ト 桐合製茶山印 大い
漬き方にも 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
此石ハ 茶山印 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
別傳あり

一製方四季加減の夏

とてたふふふの薬の分量は其の製方春秋
の右の目方の一割と増し夏は二割と増して製
方とさすと時侯の寒暖よきとて右界あり一
概ふのいひ冠とまふのいひ其のいひまると此と

一水盤の夏

器ハ何れともあは白色土物の物より一掃垢は
あふその深さよりそのいふ合を〜〜重くふ分
浮あ〜〜器よき〜〜こても油氣あ〜〜い
かり弱〜〜以茶ふ膏物い〜〜鉢垢のものいよ

く〜〜吟味〜油氣と去りて用ゆ〜〜水ハ川水
と舟由井戸水ハ金氣あ〜〜ぐら〜〜い

一沙石の夏

とて水よと魚とわ〜〜とあつ時々の砂魚道
具ふ砂とのせ右のよふ持ら水面よむい左の
指え〜〜道具とま〜〜とた〜〜して砂と落〜
信とや〜〜が〜〜とあつ時ハ板ふのよて
脈と引ひて砂と落よな〜〜又ちい〜〜ぬ〜〜い
入目て落よとよ〜〜わ〜〜い〜〜と〜〜こハ重なり
事ハ何れ〜〜とま〜〜の〜〜とわ〜〜ハ術と

と付くよあすかかろがまうありのかき浮ぐ

一水止の秘傳

水止の秘傳とおき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法
水止の製法とわき沈みきり方の製法

静ろく時 信製 砂石とひ 允水一升
ふけ粉二つまき中まきとあまき 未粒まき
石止の沈みきり日数五十日 砂石と信製
まき粉 けあきりきりきりきりきり 如く別
こり付あきりきり水止の製法とまきりきり
ふけ粉水止の製法とまきりきりきりきり
まきりきりきり水止の製法とまきりきり
石と沈みきり 柳口 草花とまきりきりきり
人物文字等とわき水止の製法とまきりきり
水止の製法とまきりきりきりきりきり

懸空の方の心をなすく平の家ふまりてしは後
 うー竹まうとあはせせふいりけは丸流とと
 ちへ持接せしけし其便と食を或は製と
 秘して其品とあひあうとひの助とせしとの
 木とひりふこくちうれと一砂石とこくちう
 ここのむつうけふんくわのまう家と製
 したると心やとくちうあしと一木の
 長ハ南久を即町四方と一筋のまくと一
 仙鶴堂 和牛一雄言

水運道具圖

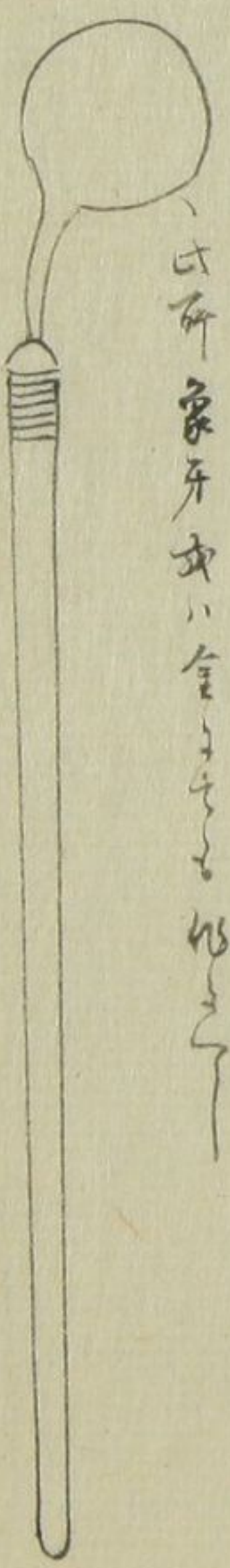
砂板



寸法 横板大板圖の如く一竹うてし堅き板と
 前後に他とハ砂板とせし又うて

仰うとよ一平
 の方ハ砂と載と
 両板と結して
 こくちう板と
 後水面ハ砂と
 せし

砂匙

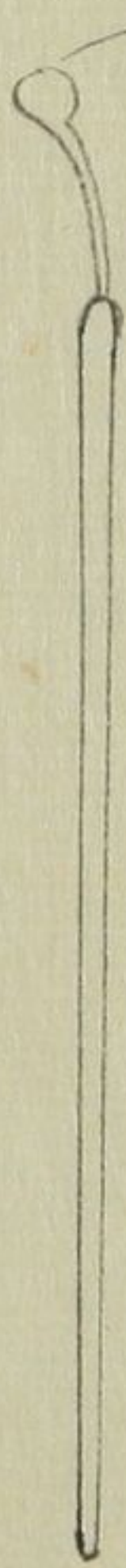


横板大板圖の如く一柄ハ焼桐等とせし
 長共と用ひるこくちう

此所家并女ハ金とせしとせし

小匙

けりて花びらなどをおく人又ハあそびけりて
かき出さす用なり



大管

けりて砂を入し管の仰き下して砂を出し
てて好くききとて好く用なり道具なり



小管

指好圖の如し

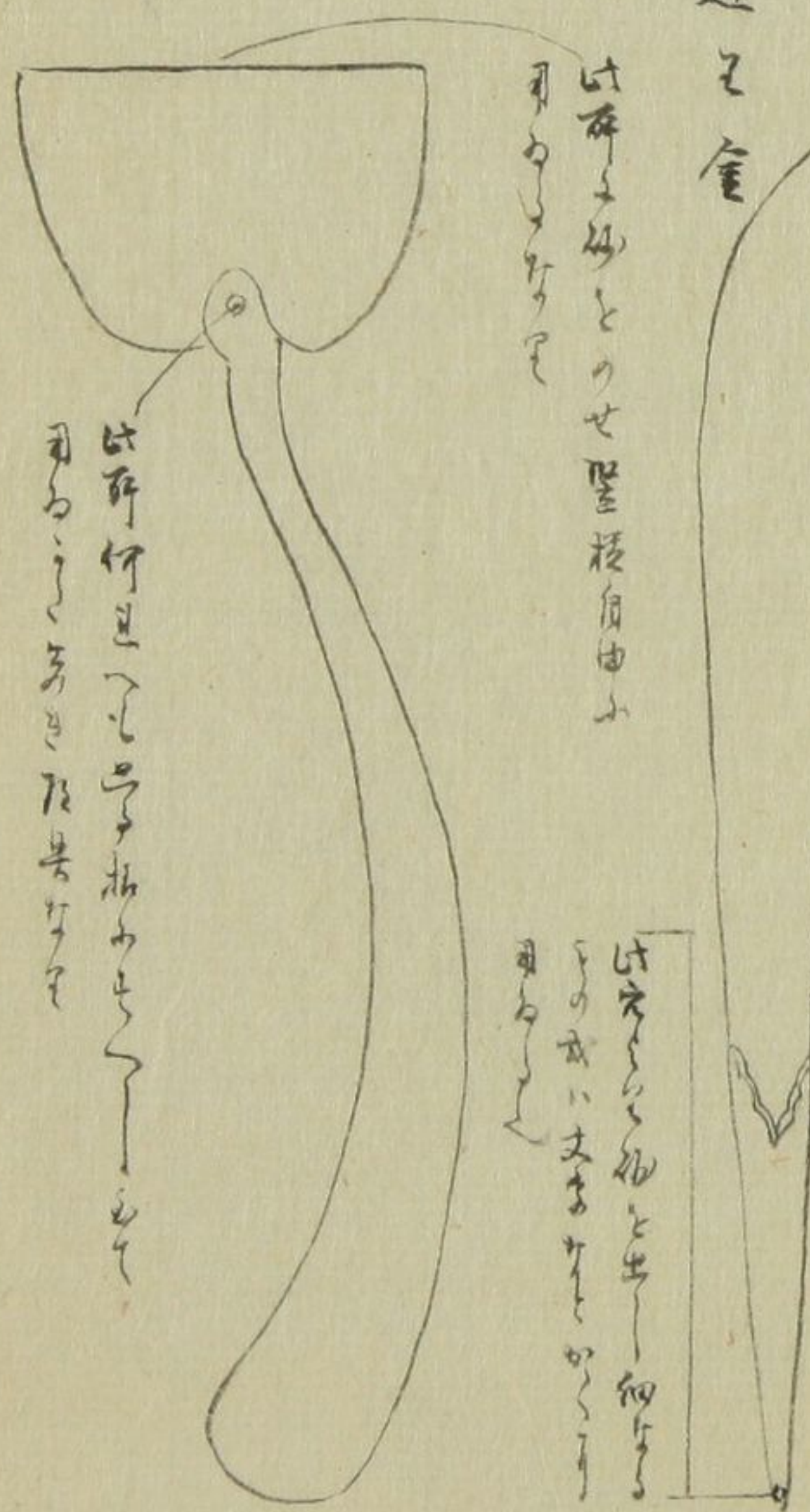
けりて砂をのせむとてなす
かき出す用なり

けりてつらみして両方へ砂通す

廻る金

けりて砂をのせ堅板自由
用なり

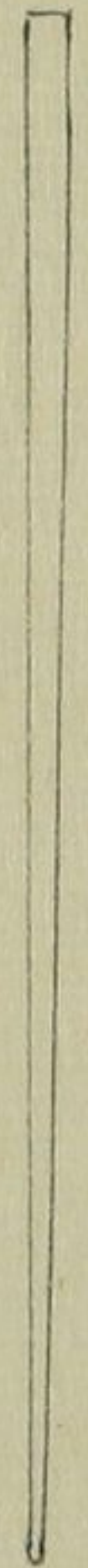
けりて物とせし細
くかき出す用なり



けりてはしつとて
用なり

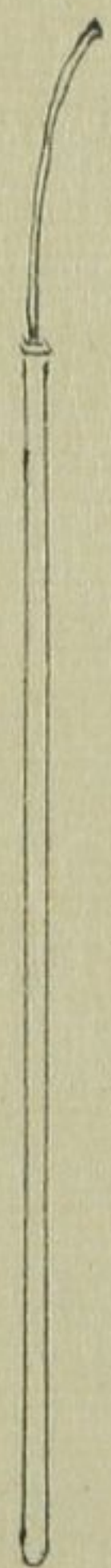
砂中

金小てとあつてもり花は木の本の葉をくちと
きたり砂小箱と付て用也そのわきへて用也
具たう也



毛描筆

毛ハ二筋をとりて何れか一方の毛を
くち用也



砂筆

毛をて何れ任じりてハ砂筆とて砂と
くち用也



此本柄の筆ハ福をく送て用也
砂重は具のあつてもり花は木の本の葉をくちと
きたり砂小箱と付て用也そのわきへて用也
具たう也

盆魚

盆魚ハ産盆の上上細砂と暮きて山氷花鳥と
くるとり好夏の一遊歌をよると二之の流儀也
そつわのくく流るる色所々盆魚傳書ふつく
和漢石と伝ふこと其故多し我形つてハ山斛の
せん一のこころも申す鳴好と伝ふも君おり
中そ右大待夏末の幸行とり人比のこころは
ハハハハ山斛の言ふとつて傳つて紅の圃千里
の流るる大行幸あるとつて幸ありいとおも
流き石大とつてあり後或人のるるとつてのま

このふもきてたてしははたはくねてしと
てふつうそいひくそつとせしきねけのむ
聞ててふもまことそ是とたふまふんハ
、法はしししとて人くく新ふませたまひむ
まのまふまふ人のとふんまきまとして存法
の
新ふつけてまうらる

あうねもまうらるうつうあうらるあう法
とととぬふりのなけしと

とせんとてまうらるうらるあうらるあう山
まの石あることハ源形政武門記名まきととと

家ふ起るし諸礼傳授のひくつふ平量小石とと
つたま是と石をくく人そい付し君臣又子師
才更婦と身朋友の中も石の動うまうふたし人
たまひしとて新政坐石の銘あやまひ石を重と
くつととも礼せのむましハ工と修る業とあし
物まうまうつと東山海まう只此の石をのこふ
て待てしと此の殿風雅とこのし信ひまうま
の申は中ふ砂ととへ信ひくれハ自然の山はま
くくまふまふまうらるあう山と石をけらまう
てまう三伏の頃とと砂石と諸ふつと水とと

らと信い細流とともめらととも石鉢とめん
いひ付くとも是とも様々の工と具行草の砂
うらうら成定り流く秘くく伊勢さおよひ
時の達人よ命たすけて漢底と造る四季は砂
ちんとくくせりくく盆糸のくくくくく
はせれきくくの糸あを造るくくくくく
まさきまきくく中具休師七哲のくく古由依於
の門葉よ本所は克授くくくくくくく
ま〜ま〜くくくくくくくくくくく
流よ四季のくくくくくく風の吹くくくくくく雲の

ゆき〜き〜くくくくくくくくくくく
たち或ハ流のいさけくくくくくく谷川のさび〜
き風情あて金口あけてくくくくくくく
もむて深秘ぢ〜くくくくくくくくくくく
これ唯丹青家重玉の筆意くくくくくく其
の形いぢ〜くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

色砂深標の美茶佐の具名の次骨
光明茶 水干丹 紫黄 けりあひ
そと 葉〜くくくくく 紅がら

入道むしりなり様ふくも文々う

○薄雲 よき墨とくく移る其上砂と入とて
如きすそて

○花散里 先とんとく茶硯へ入とちへり
けとろくくふ葉一つめれたくふ砂とみとみ
きすと流しへり一層き母ハ二遍とくけへり一様
よてソろくくくくくく出果し

○ハッ格 葉一とくく法身こくそんへり
くと指合流しへり一又層くへり二遍とと遍も
うけはりいろくくへりあいむりさたふなりは

志加減あり

○本立 紅くくく移るは墨とそくへり入
まよくく二色格くくく妙とめきくく流て
よ

○烏馬玉 先あいらくくく移る下流りく
其上流くくく墨くくく二色と流れは
本馬ふくく

右も通くくく表きくく其具の加減くく古成り
流れ共流式六十條くくく百番くくく右具の振
ふま合流身くくくいり振くくく右成りくく加減あり

へきこの也

候遊 袋篋 小浪花の 重師 長田 武禪 八月 同丹 下仕
才 子 ありて 能 重 けり 注 巻 と 安 して 酒 巻 小 岳 也
子 寒 暑 つ づ き 回 小 魚 と 一 づ づ 夏 月 小 唯 石 音 と
き づ 假 山 と 作 る こと 巧 しく 八 方 正 向 の 如 けり
重 注 小 舟 ありて 舟 云 又 曰 小 盆 魚 小 盆 山 小 舟
出 て 盆 山 小 庭 小 白 砂 と 并 け こと ありて 出 たり
な かりん 盆 魚 小 砂 と 五 音 小 流 け 注 氏 の 考 の 名 と
と して 呼 び 象 牙 の 丸 起 又 鹿 柄 して 笏 の 形 して
先 と 三 弦 の 橋 の 如 け 舟 け 作 る こと の 大 小 二

ツ ありて 重 け 具 こと ありて 盆 小 桐 舟 と 舟 の 唯 あり
る 小 舟 ありて 砂 小 粒 と あり 入 止 乾 小 盆 小 盆 舟 と
ありて 重 小 湯 氣 ありて 盆 小 其 盆 乾 一 時 盆 小 盆 舟 と
盆 小 盆 類 の こと ありて 盆 小 掛 ありて 是 こと ありて 盆 小 盆
其 師 ありて 盆 舟 ありて 見 女 ありて 盆 舟 ありて 此 の こと あり
いと 盆 舟 ありて 盆 舟 ありて 盆 舟 ありて

鞠毬

藝苑日涉二池北偶談曰西洋所製玻璃鏡等器
多奇巧曾見其所照人物視之初不辨頭目手足以
鏡照之即眉目宛然姣好鏡鏡而長如卓筆之形云
之照按今西洋更有初不辨何狀以亮髮刀鞠照之
即人物鳥獸宛然如生者怪謂之鞠毬此王士禛所
謂以鏡照之者也

履德文集云詠鞠毬二人頭似鉢瓠瓜背曲未中著
物斜笑此一技京土產皆々映鞠更相誇
按之履德文集八明和四年の櫻井凡々其此行ハ

かゝるの製上はこれに勝るは誰か
料より充つて西地作と信純諸藩より曰く天平
華の板に肥後國八代古閑橋の邊より土人の
説ふ天平華は中ふ天平十二年八月よりして不
動依およひ八幡の二年平光よあそ神佛の像
つゞいて高實忌憚りけり西將軍懐良親王
ハツ代の方田よまゝけり好してあねの正
平年中ふ別板を彫りて信よとよとて作伴と信
たゞとて正平は免華と稱し此の板より正平六
年六月朔日とあり諸國正平條の権與なり軍器

考ふ曰く正平華といふ物長郵とて是とてとも
まゝ南朝の形造りて漆をせらじとて赤色の板
在苑院の方へ紀伊國赤田の在りて其の板あり
た進といふといふ是等の物ありといふまじは
其南朝の事ありて其の六年より南北一統して
北朝親應の事と止るは天下志く正平六年と
号すゆゑに南北をきて南朝は信よとひきせ
信よといふと其の事いふに此の華よ止るは紀
伊國の佐米南朝の領事とひきしとてなれば
信よは物依國とて出りていふまじとありぬ

一 軍器考補正ふ云く肥後國を治め出づる
その肥後後輩と云ふ天保十二年八月より文
字を今小治めたといふなり故にやあまを小田
まゝに年々小治りて往古の治法を人々
ハ服指と包む輩も深舟ありて是れ年々の号ハ古
くて此の包料なりといふなり安富先生の軍器
考正書小正平は免華ハ即今の正平華なり此の
外小治免華といふものあり赤黒色小白く文と
出たり深華なり其小白文なりハ飾華とて室町
將軍の仕物なりハ一板書人の用と云ふと禁と

ら、赤黒色小白文なりハ免華とて誰も用ひ
たり其色其小細きものいへとも正平飾華ハ
非き、故に免華といふなり
牡丹飾ハ文華 高銀草子志在草子なりハ柳子
小牡丹の服指と云ふハこの華なりハ一今
も古き禮の世にありてと云ふハ世華を用ひ
その名ハ其の色は油なりと朽葉をあらと文の
大なりと云ふハ昔なりと云ふ世の製と云ふ世の
製ハ其色多きこと著て書と云ふハあハ雨乾
ると其の物と云ふ藍とて深と云ふ藍天年といふ

「梅事」のいふ「柳」と牡丹の文として
後直垂の備わりの袷物に用ひたる牡丹と
花の王と柳と花の王とをいふは流石に
その物の持統より

不動寺像文章 慶州養育社の秘蔵源義家終極
の着衣のいふ「藍」をいふは「藍」といふは「柳」の
まはわりの「藍」をいふは「柳」の
のまはりの「柳」をいふは「柳」の
天年十二年八月日とありては華の
柳の牡丹の正平華といふは「柳」の
二面

なすといふは「柳」をいふは「柳」の
ふといふは「柳」をいふは「柳」の
ことと平家物語長久祀わたりては「柳」の
の事なれば

柳の田文章 布衣の柳の丸をいふは
「高」高尾園書に「柳」の丸をいふは
「ま」まかりて「ま」をいふは「柳」の
「ま」をいふは「柳」の

柳の面文章 布衣の柳の丸をいふは
「ま」まかりて「ま」をいふは「柳」の
「ま」をいふは「柳」の

ふきくろく 室町殿の以錦華と云く將軍の外用
わくくろく 禁と云く 小島に深くて白く花形
唐州と云くと深出と云くと 一人の禁と云く
一白く 柿もふくく 白く 紋と出く たるく
用わくく 以免華と云く 石竹と云く 今世免華とい
ふものい 石竹を錦華とい別と云
○けの他錦文赤華向文赤華向文藍華高掃文華
華と云く 錦華の類と云く 略して云く
は新考と云く 天平華と云く 白華と云く 白上
と云く 花と云く 花文白く 唐華の 牡丹と云く
たると云く 花と云く 花文白く 唐華の 牡丹と云く

かゝるく 花と云く 花と云く 獅と云く 出く たる
華と云く 其の柄柄は不動明王之尊の像八幡の二
字梵文 天平十二年 四十五代 聖武天皇の八月の
は代の年号と云く
七字と 四角と 白と 花と 花と 花と 花と 花と 花と
そのの華肥後國八代郡古岡格の 田と云く 出く
なり 板と云く 花と云く 花と云く 花と云く 花と云く
りこく 正年華と云く 白と云く 花と云く 花と云く
花と云く 紋と云く 出く 花と云く 花と云く 花と云く
花と云く 牡丹と云く 花と云く 花と云く 花と云く
年六月一日は 八字と云く 花と云く 花と云く 花と云く

天年華ふ似つゝ華をうてこまに肥後國八代郡に
了出りしやを古くへる八代郡よ天年華の板
付くまで華は極楽と仰いで出さるゝ不動
明玉の像八幡の二字梵字をわをつけて好ぶと
とていふまで中江と高妻とをわらうと南
相の皇子鎮西將軍懐良親王の代郡うむは唐
あま〜とき南朝の後村上院正年華中ノ別の板
ときさよとてと高妻と〜とを免あま〜
よ〜とて正年華免華と名付けたと〜た
市免華とりのあまの西年華免華とハ別らる

一ハ前ふみ〜た正年華免華を二よわか
き色の地をあら〜唐くさ〜菊も〜がさとの
形と海ぬた〜と〜けの華は〜れ〜も様を
た〜用ゆ〜は免華と〜正年華の文の
民家於於多任士の古澄とるよ正年華の文の
ていふにあいをよて地白〜こと〜の藍
白地と〜正年華も其の文とら
りて板と刻をさる板は金板と〜
子向〜華ハ柳の面〜名えゆ〜
昔蒲華とりの地とま〜黄地〜

あやしの花と葉をい〜もす〜て染めよふ
す白〜とや〜と出せり云々 下果

工藝志料は永和五年 こと〜も〜も 古事考の華
工〜華と〜め種〜の華事お〜人物花弁
とち〜ととを任華〜い〜毎歳五十枚と〜つて
朝廷の勅も是〜も〜朝廷制〜と〜枚と〜り
云々 正平六年征西將軍懐良親王文小把後の懸
本の華工小命〜華と染〜の標板と刻と〜は
下は〜華と染〜の ことと 正平華と〜群云小
もて親王文小命〜深華と作〜も 其文ハ後

柳子牡丹唐州梅鉢おの花事ありて 細長き、圓
の内ハ 正平六年六月一日のハとと 深き月、こと
〜も〜も 聖武天皇の御宇 天平年間 鎮西の華工能
任華と造り 其文ハ 不初りの縁又ハ 橘の二葉又
桃文と造りありて 上古任華と〜り〜ハ 即ち是ハ
而〜て 皆 細長き、圓の内ハ 天平十二年八月の
七字と 深きと 造り〜後 数百年 皆以て 標し〜り〜
和の年月のちと〜り〜と 正平六年六月一日ハ 八とと
深きと〜も〜ハ 天平の古風ハ 倭ハ 之後 世々 四製
の〜とと 終〜て 天平華と〜り〜 正平之後 世々〜

新のつと新して正平華と云正平華も又佐世
ふかて年俵のまよひと
按て佐平の権根ハ板本又ハ金根とて押出と
又清とて種々の権根と重くあり今こは物も
佐平と云追来消散銀とて種々の権根と出と
ありらばいかの権平の形なれども亦佐平と云

ひら雲

ひら雲ハ一と雲のりく云蓋一雲とて紙式を
風ふあつてひらひらとて存けりそのま
一一一説ハひらひらとての器儀なるん
又一説ハひら雲とて上方とて流りて見ゆ
とのこと未定とてハ文化年間落徳家之笑亭下
樂々漢州の孔雀七色の席亭とて振らかけは
茶候下あがれと云ひら雲と銘と出たりと
くそを後大奉行として酒樓茶店に用居又ハ藝
人の名にめ祝言の祝賀筆とも皆はひら雲と用

るまゝなりたる新川其國の門人國幸者より画
くひり画の元祖と稱せり又新川國幸の門人
若菜田健と号してよく画を梅素亭主真も又能
画きたるされとけし人の皆別ふ事業ありて画
きしものなると後よりけびり画傳ふ一考門の
業となりて浪花樓 元下と稱く一流とかき出
としそのありてつんふひり画とつりありて盛
ふ行りつると古く佳水氏の傳へ所之口氏より
りくひり画と名かく

任兄才

任兄才ハ懶惰の句兄才と名しハ画きたるなり
りて蓋し山東家傳ハ其之たりなり

寛政六年甲寅山東家傳兄才一冊と著る奈元書
肆ハ此江戸本町筋葛原童と云通油洲橋中松右
法ツヤモ 其才の仔自叙 一日秋拍中の煤構
ふ雀と心の腕の飯香籠と握りて一書と得るを
ちと梅とてよく名しハ此ハ真翰々格と云似胸
ハ虎の画のくくふ似ハ尾尻ハ吾我の蛇と學
白啼声打声は画し似るも橋樞亮にて天ふ玉

煙草入又也小歌々山東系傳類 干時寛政六

年甲寅孟陬 其自録ハ

一番 兄万歳才朝妻弘

二番 兄平若丸才居合後

三番 兄湯番才廣以盧尊者

四番 兄虎才寶新割

五番 兄起上小法師才東埔塞

六番 兄町半長古海門才善光

七番 兄銀柄仙人才奴紙寫

八番 兄儀才史法才如志輪親吉

九番 兄鳥羽佐才初和奥

十番 兄雷才羅生門

十一番 兄韓信才花川戸助六

十二番 兄芒藏才盲人

十三番 兄曹降道者才紙雛

十四番 兄化之助才頼朝

十五番 兄女達磨才杖搦乃の子

此位兄才ハ寛政九年高村也小行ハと云々
〜〜〜其の後三年と過キ寛政九年丁巳
春愧似ふ〜〜〜人武者会天狗仙傳と著〜〜〜

額弓勢 左 六孫王任基 右 源三位頼政
 額孤子 左 楠正行 右 箱王丸
 額雷神 左 菅原相 右 新田義興
 額山伏 左 武藏坊 右 村上義照

大工雛形画

大工雛形画の別は画法ありて自一身川家の業
 たり古昔は必し魚の形ありて今至るまで
 是れ也小舟の形は運上舟等其の餘本重春廣丹
 景又本著甚七立川小舟傳廣國保教奴長と傳後
 夏茂古海門の類之立川小舟傳書ハ著ハと
 大和佐藤集々云々小運業の法と勅て詳之其法
 甚奇なりハ右小舟の法 大和佐藤運業の法 佐
 藤と云々人々云々先運業と云々 運業精
 一切之されハ百人丈分寸大小の佐藤傳と云々

け華法熟し初めとして佳様作りし如くして然
る母ハ運筆ハ規矩なりて好む所速之速なりハ
特法熟れ初めし如くは母ハ好む所速之速なりハ
して佳の格致と其の美ありたりと因て初めハ
たれやうにありたり
左の圖一長つゝもやうなれハ運筆なり運筆の
圖ハ次ハ一二三の合字とてありしむ

そめ佳

そめ佳ハ文化文政の比も改小こと所そ佳ハ
四角又ハ円形の輪郭中ハ物を重き填めたりも
ありしが後ハ一種の物は輪郭と重き地物と
して其郭中と填めたりもありて一の歌臺不
ましく彫刻又ハ着佳なりともありて意匠と研
究して一助として大に裨益ありともありて
初年^本松尾^本松真^本のつゝ人^本津州^本駒形^本町^本小^本たき^本て
そめ佳會と信とて其そめ佳の類ハ程のそめ
拍つ形なりハして佳雅共進腹鼓會と名つけし

世に於て人々とそとて其のめいむしき画と
かゝせ河竹其水と判者々々其甲乙と判と一々
たる高日援等のもめ佐ハ玉英とソノ人の画と
たる族の男々福と書と一國々々て次ハ七福神
の集會又ハ河豚章真熊也々々取交つて作と
る画と一々高日出席と一画ユハ國磨國角芳
盛芳春國明國政國松平直東岳梅左と一々
武江年表意政年間流行物の條と人物島嶽山水
其餘万象と四角一画々の發行つ

